

東日本震災後の対応とその支援

—— 箱庭療法からのアプローチ ——

千 葉 千 恵 美

Support and response after the Great East Japan earthquake:

Approach from the sandplay therapy

Chiemi CHIBA

高崎健康福祉大学紀要 第18号 別刷

2019 年 3 月

東日本震災後の対応とその支援

—— 箱庭療法からのアプローチ ——

千葉 千恵 美

(受理日 2018年9月13日, 受稿日 2018年12月20日)

Support and response after the Great East Japan earthquake:

Approach from the sandplay therapy

Chiemi CHIBA

(Received Sept. 13, 2018, Accepted Dec. 20, 2018)

Abstract

After the Great East Japan earthquake, there was a consultation case from a public health nurse at an evacuation center. I performed a sandplay therapy seven times for a child with post earthquake trauma at the child family center of Takasaki Health Welfare University.

As a result, the relationship between the mother and child improved and helped to rebuild their lives.

Key words: After the Great East Japan earthquake, Support, Approach from the Sandplay therapy

I. はじめに

2011年3月11日、日本を震撼させた東日本大震災が発生した。死者、行方不明者を合わせ約2万人近くの人達が犠牲となった。この未曾有の大震災の中、放射能汚染のため居住が不可能となり、住み慣れた故郷を離れ、新天地で生活を始める人達も少なくなかった。新たな生活の場所で職を求め、生活を維持していくことすべてが、予想以上の負担を強いられることになった。幼少期の子ども達にとっても同様に、環境の変化が心身に影響を及ぼした。今回はこのような状況に置かれた子どもに向けた支援方

法に箱庭療法を用い支援したことを報告する。

II. 倫理考慮

日本家族療法学会の倫理綱領2013年度改訂版に添い、面接終了後、当該論文については事前に当事者家族に論文査読をお願いし、論文投稿に際しての口頭の説明の後同意書を取得し本人の許可を得て、論文を投稿している。本研究についての申告すべき利益相反はない。

Ⅲ. 心理療法と箱庭療法の関連性

問題を抱える個人にとっては、自ら置かれた環境によって、不調和となり様々な不適応状況が起きる場合がある。心理療法は、対話を中心に心理的問題解決が出来るように、不適応状態に陥っている個人に認知や情緒、行動面等に働きかけ、変化を起こす治療方法である。この場合心理療法の特徴には、ストレスの分析や考察を行うため、薬物療法の対処とは区別されている。Gilligan・Price.¹⁾らは治療に会話をを用い、治療と会話を組み合わせることを行ってきた。また Anderson・Goolish.²⁾らは言語システムと捉え、「セラピーは、治療的会話の中で起こる言語的な出来事」と示している。Rogers³⁾は「非指示的カウンセリング」や「パーソンセンタード・カウンセリング (person centered counseling)」を展開してきた。その一方で、幼児や思春期の子どもたちは複雑化した概念や抱える問題を言語化して伝えることが苦手なことが多く、遊びの中で抽象的な表現を行い、非言語的手法として遊戯療法 (play therapy) を用いることがある。精神分析的な遊戯療法には Freud⁴⁾ や Klein⁵⁾ が遊びを通して、遊びの中で出てきた事柄を扱っている。例えば、ままごとで表された家族関係が、実は子どもと家族関係だったりする。その場合ままごと遊びの中で両親の喧嘩を再現する等、遊びの中問題を表するともあり、子どもが問題を解決できるように支援することが重要である。箱庭療法も同様に小さな遊戯室の中で、母親の温かい眼差しの中で砂の上に、玩具を置いて自由に心の表現し、箱庭に向かい完成出来た作品から支援が始まり、シリーズとして数回にわたりセッションを継続し作品の連続性が治療に生かされる。

日本に箱庭療法を具体的に紹介したのは、1965年に河合隼雄がスイスのユング研究所に留学し、カルフより指導を受け、日本に導入したのが始まりである。箱庭シリーズとして継続して複数回作る内容によって作品には「母親と子どもの関係」「父親への思い」「学校や職場での人間関係」「現在置かれた環境」など様々な状況が子どもの姿から垣間見ることが出来る。利用者が作る箱庭にはその利用者個人のテーマが見えてくる。また箱庭療法の歴史には、イギリスの小児科医 Margaret, Lowenfeld⁶⁾ が関わり世界技法 (The world Technique) を発表している。後にスイスの Dora, Kaff⁷⁾ がユングの心理学を基盤に砂遊び療法 (Sand play Therapy) に展開させ、子どもに向けた心理療法として使用し始めた。この治療方法には C,G ユングの分析心理学が活用されており、利用者の自己治癒力を高めることに有用性として示されている。

保育現場である保育所・幼稚園では、治療というよりは子どもの遊び場として園庭に砂場をつくり、子ども達の遊びに用いられ子どもたちの心身の成長を促すためのツールとして活用する。また治療には直接結び付かないが、子どもたちが個々のイメージを形で表現するために砂を用い、泥だんごづくりやままごとなど砂遊びの中で自己表現を行う。その結果、自由に自らの感情を表現方法として砂が役立つ。同様に砂場で展開する集団遊びには、子どもたちに大きなエネルギーを与える。子どもたちの集団で意図的に砂場の真ん中に大きな山をつくり、その後左右に分かれトンネル堀を行うことは、遊びを通じて互いの存在を確認する人間関係の絆を体験している。このように遊びを通じて意思疎通を図ることやトンネルが完成を通して、子ど

もたち同士で生まれる団結力や達成感を得られるのも有益であると考えられる。このように砂は感覚的な安心感と表現にも役立つまた治療目的として対象者を子どもから大人に広がりが出てきている。精神的疾患、神経症罹患者など、相談機関、医療機関、施設などで心理職のもとで展開し活用がなされるようになった。本論文において筆者は心理相談員として対応をした。

IV. 箱庭療法の使用方法と実際

1) 使用方法

面接室に箱庭で使用する玩具を置き、利用者が箱庭の上に気になった（ミニチュア玩具）を、置くことで始まる。利用者と支援者の1対1の関係と見守りにより、箱の中に玩具置くことで治療が始まる。使用する箱の大きさは規定されており（縦57cm×横72cm×高さ7cm）の長方形の木箱の中で利用者は事前に棚に置かれた玩具（図1）を手に取り自由に置くことができる⁸⁾。規定された木箱には砂が敷かれ、底にはあらかじめ絵具で水色に塗られており、砂を掘ることで海や湖を表現出来るように作られている。



図1 箱庭の材料

治療開始にあたり、支援者から説明を行い、利用者は気になった玩具を箱の内に置いていく。1セッションは約20分程度かかり、治療は数回繰り返し展開される。

置かれた玩具の置き方では1回目のセッションと2回目のセッションに変化がある場合があり、1回目使用していない玩具が2回目に登場するなど、利用者の気持ちの変化が現れる。またその逆で回数を重ねるごとに、玩具によっては同じ玩具が登場し繰り返し問題とされるテーマが現れることもある。利用者のこだわりや心の変化を観察し、支援者は、作品として出来上がるまで待つ。そして出来上がった作品は利用者から感想を述べることもある。このように箱庭療法には、利用者が自らの気持ちを自由に表現できる空間が保障されることで、結果的に言葉を用いない治療が次の段階で言葉につながる治療に展開していく。

従来示される面接では、利用者が抱えている問題を言語化し、語る方法が一般的であるが、箱庭療法の場合には、言語を主としない関わりがあり、利用者自身が箱の内で置かれた玩具と作品を見て、玩具についての思いを語ることがある。玩具を置くことで作品全体から醸し出す内容と雰囲気支援者に直接訴えかけるなど、利用者の思いを受け止めることにもつながり、治療になっている。

箱庭療法は非言語的表現を大切に扱い、語らない時間と空間を見守る治療のアプローチでもある。思いを言語化出来ない利用者の場合、利用者の抱える問題の原因が何かをゆっくりと時間をかけ、心の内にある問題を紐解くことが重要な場合がある。自由に思いを作品表現という形で玩具を生かす箱庭療法は、利用者にとっても、気持ちを代弁できる手段になりえる。

2) 相談内容と状況

期間：2011 年〇月から△月末まで 3ヶ月間

(毎週水曜日 13:30~14:30) 全7回

家族構成：母親 30 代後半 (シングルマザー)

A：長男 5 歳

母方祖母：50 代後半

父親は不在

F 県より G 県に避難所として紹介された避難所 (健康センター) に母親の運転する車で、津波と原発をさけ A、母親、祖母の 3 人で避難してきた。

この避難先である避難所では大勢の同郷 F 県出身者 30 名程の集団で館内に生活していた。母親、A、祖母の 3 人で避難所生活が 3 か月経過した時に様々な問題が発生した。最初にていた問題は A が新たに入所した保育所の登園拒否問題が発生した。毎朝玄関で怒鳴り合う親子喧嘩は館内中響き渡り、他の避難者から「うるさい」と苦情がでていた。避難所には本学設置の子ども・家族支援センターのパンフレットが置いてあったため、保健師はそのパンフレットを見て、筆者に電話連絡してきた。この保健師は避難所の専属保健師で避難者の健康管理を行っていた。保健師は「避難所で生活している人の中に相談したい母親がいる」「親子の喧嘩が難しく避難所の人達にも迷惑が掛かり、避難している人達が穏やかに生活するための支援がしたい」という依頼であった。筆者は具体的な状況を知るため保健師に直接母親に連絡を取り、保健師が仲介する形で母親から筆者に電話連絡があった。母親は「このままでは子どもを虐待してしまいそうだ」と語り、母親の電話口で話す状況から緊急性を感じ、大学で行っている「親子ふれあい教室」註 1 に親子で参加する旨の案内をした、その後親子 2 人で来所するようにと

伝え、相談事例として親子を受けることになった。

V. 箱庭療法の実際

第 1 回

母子一緒に来室、「親子ふれあい教室」に参加する。A はすらっとした精端な顔立ちの男児であった。母親は笑顔の素敵な女性であった。筆者から一通り「親子ふれあい教室」の活動内容を伝え、A が対象外年齢 (0 歳から 2 歳児) の親子であることや、参加親子の年齢が小さいことを話した後、親子に生じている問題解決の支援をしたいと伝えた。

入室時、母親は A に関心を示さず靴を一人で脱ぎ図書コーナーに行き、絵本を見始めた。入口に一人置かれた A は入口に立ち佇んでいたが、ボランティアで活動に参加していた女子学生に促され靴を脱ぎ部屋に入った。しかし、A は母親の傍には行かず、女子学生の傍で絵本を見ていた。昼食には母親がコンビニで購入したおにぎりを 1 つ A に渡すと、A は渡されたおにぎりを受け取り、母親に背をむけ食べ始めた。A の頭頂部に円形脱毛症と思われる個所が 2 つありストレスによるのか髪の毛が抜け落ちていた。「親子ふれあい教室」では他の親子が遊ぶ姿を見ながらも 2 人で関わるのがなく 1 回目の活動が終了した。活動終了後、A は母親の隣に座らず、絵本戸棚の脇に座り、母親を睨むように見ていた。母親には A の様子には気にも向けず参加親子の輪に入り会話を楽しみ、他の母親と会話を楽しんでいた。A と筆者は別室に移り、A の話を聞くことを始めた。A は下を向き筆者の問いかけに沈黙する時間が 10 分程度続いた。突然顔を上げ A が部屋の隅にあ

る玩具をみて、「これはなに」とトンネルを手にとった。筆者から「これはこの箱の中に気になるおもちゃを入れて作るの」と説明した。するとAから「作ってみる」と返事があり、箱庭療法が開始した。



作品-1

トンネルを中央に置き、その後ろにお城を置いた。右側には実ったリングを置き、囲いで動かないようにする。またトンネルの左下には汽車を置いた。

〈作った後の会話〉

A：「僕は家に帰りたい、いつまであそこにいるの?」「お母さんはいつも怒ってばかり」「おばあちゃんもわがまま言わないのだよ」って「僕がいつも我慢するように言われる」「もうたくさんだ」「保育園も楽しくない、もう行かない」「仲のよかったお友達と会えない」「さようならも言わずに来てしまった」「いつまでここにいるのかわからない」とAが初めて話した内容だった。

Aが作った箱庭を母親に見せ箱庭療法の説明後了解をAと母親から得て写真撮影を行った。

第2回

母親とAが来室。前回とは異なり一緒に靴を脱ぎ、下駄靴箱に靴を入れた。Aが先に絵本コーナーに行き、前回読んでいた本を探し始めた。母親も絵本を探し、2人で同じ空間で絵本を見始めた。母親がAに話かけると、Aは顔を上げるが言葉はなかった。他の親子が入室してくると、母親は母親達の間に入り楽しげに会話を始めた。Aは前回ボランティアで参加した女子学生と絵本を嬉しそうに見ていた。



作品-2

先週と同様トンネルを手に取り、砂の真ん中に置いた。お城と汽車を置き、二両車連結の新幹線を置いた。トンネルの下にはガソリンスタンドを置いた。

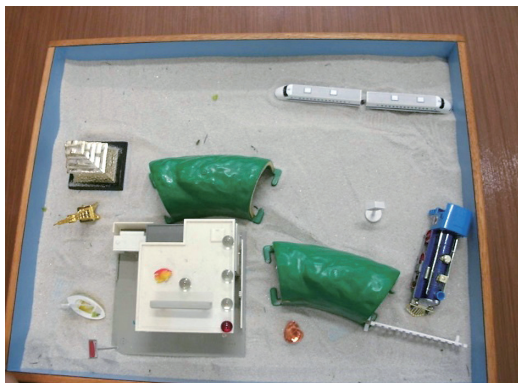
〈作った後の会話〉

「帰りたいけれど、帰れない」「新幹線は動き始めているけれど乗れない」「汽車も同じ、乗れない」「静かな誰もいないところになっている」「このまま動けない、誰も助けに来てくれない」「保育園にはいかない、ここに来るのはいい」「朝からお母さんが張り切っている」「ここにくるのは保育園にいかなくともいいから」「仲のよかったお友達、みんな元気だろうか」「お友達に会いたい」と語った。親子の緊張感

は前回の作品-1よりも今回の作品-2が薄れ、距離感が近くなっていた。

第3回

母親とAが一緒に来室。忘れ物としたと言い、車の鍵をAに渡した。Aが戻っている間、母親が筆者に「朝保育園に行く、行かないでもめることが少なくなった」。「このように週1回でもこちらにきて色々なお母さんと少し話をするだけで、私の気持ちが変わる」「Aに怒ることも少なくなった」「けれどもこれからどうしようかと思う」「避難所担当の保健師に相談したら、こちらで通いながら、仕事を見つけてもいいのではないかと」とアドバイスもらったと語った。「親子ふれあい教室」の活動では、Aが母親の傍に座り、母親と一緒に歌い始めた。その姿に母親は嬉しそうにAを見た。Aは照れ臭そうに母親の顔を見るように変化した。



作品-3

トンネルを中央に置き、お城、汽車、ガソリンスタンドを前回と同様に同じ場所に置いた。一車両連結の新幹線を左下側に置く。新たに恐竜が置かれた。恐ろしく襲いかかろうとしている。お城の脇には柵が置かれた。ガソリンスタンドの上にはりんごとレモン、椅子が置かれた。

〈作った後の会話〉

「何か悪い事が起きるのではないかと心配」「突然怖い夢をみる」「恐竜が自分のところに襲ってくる。同じ夢である」「目が覚める」「なぜここにいるのだろう」「これからどうなるのかが分からない」「これから恐ろしいことが起きるかも知れない、とても不安」と語り、避難所でのAの生活状況や不自由さそして緊張感が表わされていた。

第4回

母親より先にAが来室してきた。Aは一人で靴を脱ぎ絵本コーナーに向かった。女子学生に保育園の報告をしていた。母親は筆者に嬉しいことがあったと話し出した。「昨日保育園に登園、保育園に行く友達を見つけ遊んでいた」「迎えに行った際保育者から大丈夫でしたよ、1日楽しく過ごしていました」と嬉しそうに語った。更に「以前の仕事と同様なスキルを活かせる仕事をそろそろ始めたいと思うようになった」「今日この後ハローワークに行くことにした」「腰を据えて生活を考え始めている」「祖母は戻りたいと言っていたが、同意してくれた」「3人で新たに生活することもいいかもしれないと思っている」と語った。



作品-4

作品-4ではトンネル2つとお城 汽車、一車両連結の新幹線は3回目と同じ位置に置く、またガソリンスタンドも同じ位置に置いた。ガソリンスタンドの上には椅子とレモンが置かれた。新たに蛇と犬が置かれた。また右下隅には水車、お城の脇には塔が置かれた。

〈作った後の会話〉

「大切な犬が、僕の帰りをじっと待っている」
「早く帰らなくてはならない」「会えなくなってしまう」「今は帰れない」「まだ怖いことがたくさんある」親戚に預けてきた犬の夢を見たところから、犬のことが気になっている。迎えに行けないと語った。

第5回

母親とAと一緒に来室。母親から「Aが1週間に3回保育園に通えるようになった」「園からもこの調子で通えるようになればいいね」と褒められたと語った。「毎日怒鳴って玄関で、園に行かないと言い張り、もめていたことが嘘のように思える」「Aも保育園の話をするようになり、給食の内容や味付けが違うことや遊び方が違うことなど、楽しげに語ってくれるようになった」「おばあさんにも素直になった。」「一時はおばあさんにも、わたしにも暴力をふるい、私はAを虐待してしまうのではないかと心配した」「安心して生活ができるようになった」「仕事も来月から出来るかもしれない」「新しくスタートしたような気がする」と語った。



作品-5

作品-5 ではトンネル、汽車、2 連続きの新幹線 お城 ガソリンスタンド その上に椅子、レモン、犬、蛇、水車 恐竜を置いた。新たにサメが置かれお腹に赤い石を置いた 左側の箱の淵にはエイを置き、4 回目の作品内容とは少し変化があった。

〈作った後の会話〉

「サメが流れてきた」「血をお腹から吹き出し倒れている」「きっとこのような人はいっぱいいた」「友達や預けてきた犬、親戚のおばさんたちは大丈夫か」「迎えにいかなくてはならない」「今は助けにいけない」と語った。

テレビで放映された津波により家が流される光景、また死者の報告と行不明者状況から、親戚を心配していた。母親が親戚に電話をして安全確認をし、犬が元気であることを A に伝えたと安心したと語った。

第6回

母親とAが仲良く話をしながら来室、園の行事について2人で打ち合わせを始めた。内容は母親の就職が来月から決まりそうであることや保育園の行事をどのように参加するかという親子の話になっていた。Aは園で出来た友達と一緒に参加するため、母親にお弁当の準備や水

筒などを遠足に向けた準備をしてほしいと母親に依頼していた。母親は仕事を開始しに向け、親子にも活気がでていた。母親から「仕事が始まると『親子ふれあい教室』の参加や箱庭をつくる活動ができなくなる」と報告があった。Aも「もう来ないと思う」と語り昼食は母親の手作り弁当を持参し2人で中身を確認しながら弁当のふたにAのおかずを取り分け、2人で楽しみに食べるように変化していた。



作品-6

作品-6ではトンネル、お城、汽車、一車両連結した新幹線を置いた。ガソリンスタンドを置き、その上に犬が置かれた。ウルトラマンと恐竜が戦いを行い、両方力尽きて倒れている。蛇とエイはそのまま置かれ、サメは泳げる状態で横たわっていた。

〈作った後の会話〉

「大切な犬が大丈夫だということが分かり安心した」「親戚の人達も大丈夫だった」「早く迎えに来てほしいと言われた」「家が決めれば犬を連れてくることになった」と語った。

母親の仕事が正式に決まり、故郷には戻らず新天地G県で就職することになった。避難所からの退去も迫り、1軒屋を借りることになった。Aが心配していた犬を引き取りに、親戚の

家に行くことになったことなど。避難生活にむけて国からの支援を受けて生活が始まることになった。母親は「すべてこれから始まる」と嬉しそうに語った。保育園にはAが通えているため、「親子ふれあい教室」や箱庭は終わりにしたいとAが筆者や女子学生に語った。

第7回

母親とAが早めに来室してきた。他の利用者がいない状況で母親から、「今日で最後の活動になる」と挨拶があった。「今週の土曜日と日曜日に引っ越しが決まった」「親戚が手伝いに来ると同時に犬がやってくる」。「家財道具は家から運び出せるもの、こちらで買い揃えることにした」。「仕事は以前行っていた英語力を生かした職業である」と語り、「当面Aと祖母、自分を入れて3人で生活できる目途が立った」と語った。

活動中には、保育園で作成した折り紙を女子学生に渡し、Aは感謝を伝えていた。



作品-7

作品-7では今までの内容とは大きく変わり、トンネルは1つ減り、お城とトンネルが繋がり、欄干の赤い橋が置かれた。橋の上には豚が3匹歩き、トンネルも開通し車が通れるように置か

れた。左下には2件の家が置かれ、左上には森が置かれた。また全体の動きを見守っているお坊さんが置かれた。

〈作った後の会話〉

「引っ越しした家でテレビを見ていたら、以前住んでいた家が映った」「とても嬉しかった」「みんな元気だった」「引っ越しの時もみんなに会えた」「犬も元気だった」「お母さんの仕事が決まった」「よかった」「テレビではお坊さんが亡くなった人のために色々な個所を巡り祈っていた」「それを置いてみた」と語った。

VI. 結果

1) 実際の作品から見えたこと

今回示した事例は7回シリーズで作成された作品には、利用者がこだわって使った玩具にトンネル、お城、ガソリンスタンド、二車両連結の新幹線、などの玩具があった。繰り返し作成された作品の中の箱庭には、同じ玩具が用いられていた。1回目から6回目の作品にはいつもトンネルを二つ離して置き、繋がらない世界が作られた。このような場合変化するタイミングと状況で「生まれ変わる自分」「今の生活の不安とこれからの生活」等「家族の建て直しのテーマ」が表現されていた。

また最後のセッションでは、2つあったトンネルが1つになり、そこへ橋が架かり一つの世界になった。このことで、いままでとらわれていた故郷と新たな生活場面が統合された。

震災における避難生活は、予想以上に家族にも負担をかけており、この状況がはっきりと浮き彫りになった。しかも極度の緊張感や不安が潜在化していたため些細なことで、問題が大きく発展し、避難所内での親子喧嘩という家族関

係が作られていた。しかもこの悪循環がさらに親子関係を悪化させ虐待に発展しかねないほどの大喧嘩となり周囲を巻き込んでいた。このようながみ合う親子の関係であったが、その一方で、本音のところでは2人とも穏やかに関わりを持ちたいと思ひもあり、その思いが表すことが出来ずにいたAは執拗に母親に絡み怒らせ、母親はAの行為に腹を立て怒鳴り叩いていた。この事態は生活環境を改善するためにも、新たな生活場所を探し建て直しの課題があった。そしてAは母親に激怒され叩かれるストレスをじっと耐えている状態でもあった。Aにとっては避難所の密室空間で孤立し、自由に遊べない状況に置かれていた、友達と突然の別れと、新たな保育園に通うこともできずにいたAには、誰にも語れぬ寂しさの中でひたすら母親への思いを募らせていた中で、母親も将来にむけた方向性を見いだせず、行き詰った状況だった。

2) 治療への展開として

今回Aが箱庭を行うきっかけを自ら無意識に箱庭療法を選択し展開していたことだった。それはA本人が解決策を自分で見つけていたとも考えられる状況でもあった。最終回までの計7回のセッションを終えるまで箱庭は継続して関わる事が出来ていたことは、Aにとって、自らの気持ちを箱庭に表現しその作品を目前にして言語化したことが治療に役立っていたと言える。

最初の段階でAの思いは、母親に自らの思いを伝えることにこだわっていたが、母親には思いが伝わらずに終わっていたことでAは気持ちをどのように伝えていけばよいかを悩んでいた。一方で母親はAの思いに気づかず、こ

れからの生活の目途を立てるための方策や将来を考慮に入れた生き方の選択肢を思案していた。そのためAのメッセージを受け止める余裕は母親にはなかった。この親子の関係性は肝心なところで築けずにおり、大きくずれていたことだった。Aの登園拒否は唯一Aが母親に自分の意思を伝えることができる行為でもあり、Aは精一杯反抗して騒ぐという形で表現していた。母親はAの行動を直接受け止めきれずAのわがままとして行動を阻止する方法で怒りを、Aにむけ怒鳴り叩くという虐待に近い形でエスカレートさせていた。避難所の保健師が親子の状況をみて虐待の予備軍に入れていた背景もこの状況下で観察できたからであると思われた。当初避難所で親子の関係性を見つけた担当の保健師が的確な判断により、本学の子ども・家族支援センターへつながったことが虐待予防となったが、緊急性の高いハイリスクの事例だったと考えられる。母親の直接的なAに向けて怒鳴る行為と叩くという行為はAの円形脱毛症という症状として示されていた。そのため母親への支援にはAが箱庭を作っている間子ども家族支援センターのスタッフである精神科医が数回相談を行った。また祖母にも夏祭りに参加を依頼し、母親、A、祖母の3人で避難して初めて楽しみ活動にもつながった。祖母、母親、Aの3人の関わりにも流動的な関係性ができ変化がでたのもこの時期だった。

VII まとめ

面接方法には様々な対応を用いるが、今回は箱庭療法を用いた。東日本大震災により、長年住み慣れた故郷を離れ、また住む場所を探し求め、たどり着いた親子にむけた支援を行うこと

が出来た。親子にとっては新たな地に根付く難しさがああり、親子には想像以上に大変な負担があった。その中で親子は失った故郷を思い出しながらも新たに踏み出して行った事例である。

言葉ではない伝達方法によって「心の思い」を箱庭療法で表現することが出来た。それは、Aにとって一番望んでいた母親と「親子ふれあい教室」で一緒に関わり活動に参加出来るように変化した。母親と望んでいたふれあいを体験でき参加したことも嬉しい出来事になり、母親も他の母親達と関わるのが楽しみになっていた。

親子が互いに反発し合い、いがみ合う状況から、互いに存在を確認し、安心して関わる事が出来るように変化したことは互いに望んでいたことでもあり避難所に身を置き、将来への諦めと絶望の中で、徐々に生活設計を考え動き出す強さが親子にあった。同時に気がかりであった故郷に置いてきた犬を迎え入れ、故郷生活状況を再び作れたことも勇気となり改善につながっていった。

このように利用者を支えるツールに箱庭療法は役立だったと考えている。

文献

- 1) Gilligan S; Price R. Therapeutic Convesation. New York, Norton,1993.
- 2) McNamee S; Gergen J. Therapy as Social Construction. London. Sage. 1992.
- 3) R Rogers C. A theory of therapy, personality and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework. Psychology: A study of a science. 1959, (1), p.184-256.
- 4) Freud Anne. The Psychonalytical Treatment of the Children. London, Imago, 1946.
- 5) Klein M. The psycho-analyticplay technique: It is history and significance. Am J Orthopsychiatry. 1995,

25(2), p.223-237.

6) Lowenfeld Margaret. New Approach to The Problem of Psychoneurosis in Childhood. Brit J Med psychol. 1931, 11(3), p.194-227.

7) Dora M. Kalf 1904年にスイスで生まれ、1990年86歳で他界している。カルフは、以下3つの視点を示している。「自己」「母子一体」「自由で保護された空間」箱庭では、自己が示されると考え母子一体性は、利用者と支援者の関係は、母親と子どもとの一体感と同じであると捉え、子どもが成長していくためには、母親の元に戻り、母親との一体感を味わい、そこから成長するという意味合いをとっている。

8) 秋山達子. 箱庭療法 SAND-PLAY TECHNIQUE 箱庭療法の基本 I 章 基本材料. 日本総合教育研究会, 1977, 6p..

註1 平成17年(2005)文部科学省オープンリサーチセンター構想として補助金を得て翌年平成18年(2006)から高崎健康福祉大学設置で子ども・家族支援センターが開設された。

地域住民の心と体の疾病予防と心と体の健康維持を目的にしており「親子ふれあい教室」は地域住民への直接的な健康支援で、親子ふれあい遊びと親自身の育児不安の解消のための相談機能を組み合わせた支援プログラムを企画し実践している。月2回曜日固定で年齢別の参加親子が10:30~12:30まで「子ども・家族支援センター」に遊びきており昨年10周年記念誌を発刊することができた。